

高沐鴻の詩作について¹

——狂飆運動期の作品を中心に——

内 藤 忠 和

1. はじめに

1. 1 高沐鴻（1900年11月21日～1980年8月25日）について

山西省武郷県の人、幼名は高福鎖、学名は高成均、字は鴻甫、使用したペンネームは、劣者、B、馬丁、畢未朽、仏量など。1918年太原山西省立第一師範学校に入学し、在学中に五四運動の影響を受け、同窓生の張友漁、張盤石らと共に進学舎を組織し、『共鳴』という刊行物を創刊した。1921年、新詩の習作42編を収録した『新詩集』を発表した。1922年5月『教育雑誌』誌上に『新詩集』の作品を発表している。1923年太原山西省立第一師範学校卒業後、太原一師附属小学校に勤務する。この年の夏休みに高長虹と出会い、同時に彼が発足させた狂飆社に参加した。1924年9月創刊の太原版『狂飆』月刊及び北京版『狂飆』週刊に作品を発表している。

1925年高長虹の推薦によって魯迅主宰の『莽原』週刊に作品17篇を発表した。1926年夏武郷の進歩青年武靈初、李逸三たちと太原で星光社を組織し、自ら社長に就任し、ガリ版新聞『星光』月刊を出版し、専ら武郷県の汚職官僚や田舎の顔役を批判した。冬休みに帰郷した際、逮捕され獄に繋がれたが、後に友人の援けによって出獄した。狂飆運動が上海に拠点を移し、10月上海『狂飆』週刊が創刊されると、誌上に作品を10篇発表した。1927年2月下旬、狂飆社の若手王玉堂（岡夫）、趙石賓、李選青らと文芸雑誌『SD』を創刊した。1928年9月下旬に高長虹の求めに応じて上海に赴き、狂飆社出版部を担当したが、1929年1月中旬、肺病のため入院し、6月1日に上海を離れて帰郷した。

1930年4月27日『山西日報』の文芸副刊『前線上』の創刊に関与した。秋友人の紹介によって綏遠省立第一図書館で仕事をすることになり、その間『綏遠民国日報』文芸副刊を主宰した。吐血が再発したため、1932年の初冬に太原に戻る。同郷の武靈初が主宰する山西青年図書館臨時クラスに参加し同時に社会主義青年団に加わる。1933年武郷に戻り農民運動を発動して指名手配

される。1936年北京に向かい左翼文化運動に参加し、同年中国共産党に加入した。

1937年、抗日戦争勃発後山西省委から晋東南に派遣され、榆社の抗日県長、晋東南文芸界抗日救国総主任理事兼秘書、『黄河日報』編集長、太行文聯主任などの職を歴任した。また抗日戦争及び国共内戦期間中は『文化動員』、『華北文化』、『文芸雑誌』といった文芸誌の創刊及び編集を担当し、晋東南地区の文芸組織の立ち上げ、そして発展に尽力した。

1949年、中華人民共和国成立後は山西省文聯主任となり、『文芸雑誌』改め『太行文芸』の主任編集者を務める。1950年には山西省人民政府監察委員会副主任に転じ、1954年に山西省委宣伝部副部長の職に就いた。この時期には長編詩『太行吟』、『十二月之歌』を執筆している。1957年右派に認定され、山西省図書館副館長に降格となり、以後文化大革命終結まで沈黙する。

1978年、名誉回復後は山西省第4回政協副主席に復帰し、1980年には『回春室詩鈔』を出版するなど旺盛な創作力の回復を見せた。1980年8月病により逝去。

主要作品に『天河』（1927年 光華書局）、『夜風』（1928年4月 泰東書局）、『紅日』（1928年9月 泰東書局）、『狹的囚籠』（1929年5月泰東書局）、『湖上曲』（1929年9月 南華図書局）、『少年先鋒』（1931年4月 振東書局）、『美滿家庭』（1944年 華北書店）、『古話正誤』第1集（1944年 韜奮書店）、『太行吟』（1956年 山西人民出版社）、『十二月之歌』（1957年 山西人民出版社）、『回春室詩鈔』（1980年7月）、『高沐鴻詩文集』（北岳文芸出版社 1992年）などがある²。

高沐鴻は、1920年代の北京・上海を拠点に活動した文学流派“狂飆社”の創立メンバーの一人であり、山西省における中国近代文学の開拓者であった。抗日戦争及び国共内戦期においては、晋東南地区における文芸家組織の発足及び発展を指導し、建国後は“右派”認定され20年間もの雌伏の時を過ごすも、名誉回復後は文壇の重鎮として復活した。いわば波乱万丈の20世紀中国文学の歩みを体現する存在であった、と言えよう。

1. 2 先行研究

高沐鴻を巡る研究は概ね以下の2つに分類することができる：

① 狂飆社研究における高沐鴻

上述のように、狂飆社は1920年代に活動した文学流派であるが、当時の文壇の中心的存在であった魯迅との軋轢、活動期間の短さによる現存資料の欠

落、リーダーである高長虹の共産党との反目、といった理由から1920年代から70年代にかけて狂飜社に関する研究は殆ど存在しない³。こうした状況に変化が訪れるのは1980年以後のことであり、晩年の高沫鴻へのインタビューである「狂飜社及其他」（曹平安『汾水』1980年12期）から狂飜社を巡る研究は本格化した。以後、a. 当時の関係者による回想（「“狂飜” 瑣憶」（尚鉞『新文学史料』1981年第4期）・「我和“狂飜社”」（張稼夫『山西文学』1982年12期）など）・b. 高長虹と魯迅の論争（「魯迅与狂飜社」（陳漱渝『新文学史料』1981年第3期）など）・c. 狂飜社という文学流派の紹介（「関于『弦上』」姜德明（『新文学史料』1982年第2期）・「高長虹与狂飜社」（趙潤生『文史月刊』2002年第5期）など）・d. 狂飜社自体の思想的、文芸的価値の検討（「狂飜社的思想傾向和文学創作」（湯哲声『江海学刊』1987年第5期）・「狂飜社編年紀事」（董大中『新文学史料』2002年第3期）など）といった成果が登場するようになった。近年にあつては『一群被驚醒的人—狂飜社研究』（廖久明 2011年 武漢出版社 以後 廖 2011）といった狂飜社の歴史的経緯から思想的背景及び文学的価値に至るまで幅広く視野に入れた成果も出始めている。

これらの研究において、高沫鴻は高長虹の盟友として狂飜社を支えた人物として言及されるが、あくまで焦点は主宰である高長虹にあてられており、高沫鴻の果たした役割・位置づけ、そして高沫鴻自身の創作についての考察は断片的なものに限定され、十分とは言い難い。

② 高沫鴻個人に関する研究

高沫鴻個人に関する研究は1990年、作家協会山西分会が彼の生誕90周年を記念して開催した座談会をきっかけに活性化し、その成果は『高沫鴻詩文集』（1992年 北岳文芸出版社）という形で結実する。主だった傾向としては；イ. 高に近い人々が彼の死を悼み、生前の人柄及び事績を紹介したもの；「嚴正寬厚 立己立人 - 憶念沫鴻同志」（岡夫 1991年）⁴、「留取丹心照汗青 - 緬懷和父親在一起的日子」（高介雲 1990年）、「高尚的風範 崇敬的良師 - 深切懷念高沫鴻同志」（史如璧 1990年）、ロ. 彼の生涯と創作活動の概略を記述したもの；「高沫鴻生平及創作年譜」（李東光）、「高沫鴻伝略」（李志寛ほか 1991年武郷県党史研究室）、「一代狂飜靡太行」（夏洪飛 1991年8月）、「高沫鴻与山西新文学的發展」（董大中）、ハ. 高沫鴻の創作について論じたもの；「時代變遷的踪跡 - 讀高沫鴻的詩」（曲潤海）、「划破暗夜的利剑 - 试評高沫鴻的早期诗集『夜風』」（李東光）、「試析長篇小説『少年先鋒』的審美芸術」（李志寛）

「小説『狹的囚籠』初探」(朱玉楼)、「太行抗日根拠地的社会生活画卷」(尤敏)など、の三種に分類することができる。

このように、高沐鴻の生涯とその創作歴についてはかなりの部分が明らかにされている。しかしながら彼の創作に関する研究は単独の作品を対象としたものが多くを占め、その全貌に取り組んだものは管見の限り未だ存在していない。

1. 3 本稿の位置づけと目的

ここで本稿の目的について述べておきたい。先に触れたように、高沐鴻は中国近代文学の黎明期から文革後に至るまで創作活動を続けてきた稀有な存在でありながら、彼の創作の全体を視野に入れて論じた研究は現状皆無である。

論者は今後高沐鴻の詩、小説、散文を対象にその文学活動の全貌を明らかにしていく予定であり、この一連の作業を通じて①高長虹個人の研究に偏りがちな狂飆社研究をより豊かなものにする。②高沐鴻がその出現を準備した山西省出身の作家群“山葉蛋派”との比較を行い、中国近現代文学の連続性について改めて考察する。といった成果の獲得を目指す。

本稿はその第一歩としてまず高沐鴻の創作歴が最も長い詩作を分析の対象とし、年代順に分析を加えていきたい。

2. 幼少期から習作期

高沐鴻は山西省武郷県の比較的裕福な家庭に生まれ育ち、私塾そして高等小学校を経て1918年には太原山西省立第一師範学校に入学した。在学中の1919年に五四運動に出会い、同窓生の張友漁、張盤石、郭樹棠らと共進学社を結成して雑誌『共鳴』を発行し、新思想、新文化を宣伝するなど啓蒙運動に取り組んでいる。この時期、高は魯迅や茅盾、郁達夫及び郭沫若といった当時の新文学の洗礼を受け、後に1921年に自身初の詩集となる『新詩集』を編み、その一部を1922年5月に発行された山西『教育雑誌』8巻1・2期“学芸成績号”誌上に発表した。当時42首が掲載されたが、現在はこのうち15首を目にすることができる。

「扫雪」

厚沉沉的，光晶晶的，白澄澄的，好一片可爱的积雪。

我挑着笼儿，拉着帚儿，信着步儿，

有意思打扫他去。

一对小鸟儿，欢喜的踏着雪儿跳跃。他俩走过的路，一条一条，枝儿茁儿，也不知道找甚么吃的？也不知是描什么图画？

我对着雪儿鸟儿，呆呆地出了一回神，又不舍的扫他去了！

一轮炎日，带着羞怒妒忌的脸，努力盯注在雪上。渐渐的雪不支了！

我的鞋底也沾着泥了！

我忙着又挑又扫，并且说：“与其他晒坏，不如我扫了。”

「掃雪」

ずしりと、きらきらと、白く澄み切った、可愛らしい一面の積雪。

私は籠を担ぎ、箒を引きずり、気ままに、楽しみながら掃き清めていく。

つがいの小鳥たちが、喜び雪の上で踊る。彼らが通った迹が、一筋一筋、枝のように芽のように、何か食べ物を探しているのだろうか？それとも何か絵を描こうとしているのだろうか？

私は雪と小鳥を前に、暫くぼうっとし、掃き清めるのが惜しくなった！

灼熱の日輪が、嫉妬に狂った顔をして、雪をじっと睨みつける。次第に雪も持ちこたえられなくなった！

私の靴底も泥に汚れてしまった！

私はあわてて掃き集め、言った：

“溶かされてしまうくらいなら、私に掃き清められた方がましだろう”

これは『詩文集』冒頭に収められた作品である。降り積もった大雪の中戯れる小鳥という日常の情景とそれを愛でる詩人の心象が描かれており、青年らしい潔癖さも読み取ることが出来る。こうした“我”の目を通して自然を描き、その美しさを礼賛する傾向は「窗孔透进的太阳」,「瀑布」,「自然」などにおいても見出すことができる。

また、詩人の眼差しは貧困に苦しむ人々や社会の矛盾にも向けられ、時にその理不尽さに憤りもする；

「洋車夫」

洋車夫拉着客人在雨里跑，
地下的淤泥，
没上他的胫梢。
雨也玩笑他，
“喔啼，喔啼，”又放了他几交。
他跌倒起来，
把客人惹怒了！

「人力車夫」

人力車夫は客を乗せて雨の中を走る、
地面の泥が、
彼のくるぶしまで埋める。
雨も彼を嘲笑い、
“グチュ、グチュ”と
彼は躓き倒れ、
客の怒りを買う！

「六三运动」(四)

六三啊！
新华门外，
小雨の朝，
教育的殷血，
染遍大地了！

「六三運動⁵」(四節)

六三よ！
新華門の外、
小雨の朝、
教育の血は
大地を染めた！

こうした大自然の美を創造し、同時に社会の貧困・理不尽な暴力をも生み出す源泉として、若き高沐鴻は意思を持つ「宇宙」という存在を作中に登場させる；

「宇宙之魔」

宇宙之魔，
把快乐都垄断了！
他满布苦的种子，
杀人，
放火，
少衣，
没吃！
在这块无边的大地上。
他又逼着我们，
耕耘，
收获，

「宇宙の魔性」

宇宙の魔性は、
快樂を全て独占した！
彼は苦しみの種を蒔き散らす、
人を殺し、
火を放ち、
衣食を断った！
この無限の大地の上で。
彼はさらに我らに、
耕させ、
収穫させ、
我らを苦しめる！
我らを憂い疲弊させる！

我们吃苦了！
 我们扰攘的不了！
 他摇着策世之鞭，
 座在无上的宝殿，
 笑着说：
 好一幕热闹的剧啊！往下演吧！

彼は世界を操る鞭を揺らしながら
 天上の宮殿に座り、
 笑いながら言う；
 何と賑やかな芝居だ！続けたまえ！

このような世界をコントロールし、善悪双方を生み出す「宇宙」の意思の存在に言及した作品として、本作以外にも「瀑布」, 「夜」, 「懺悔」などを挙げることができる。

五四運動の洗礼を受けた地方の知識青年は、目覚めたばかりの自我というフィルターを通して自然の美しさを描出し、またその眼差しは同時に貧困や理不尽な暴力といった社会の矛盾にも向けられる。そしてこうした美と醜悪ともに生み出す源泉として、宇宙の意思という高次の存在を設定するが、この時点において宇宙そのものに対し何らかの価値判断を下すことはない。

3. 狂飆社概要

本章ではまず1923年から1930年にかけて高沐鴻が所属した文学流派である狂飆社の活動の概略について触れておきたい⁶。

太原での結社

1923年夏、高沐鴻は山西第一師範を卒業し、太原一師付属小学校の教員に配属された。この時期、第一師範時代の先輩であった高歌を通じて彼の兄である高長虹（1898 - 1954）と知り合う。高長虹は五四運動以前から活動していた知識青年であり、当時既に中央文壇にも文章を発表していたこともあって、高沐鴻ら五四運動によって目覚めた青年たちの指導者的地位に就く。

この頃から高沐鴻は高長虹の影響を受けて活発な創作活動を開始し、後に詩集『天河』としてまとめられる詩作を完成させており、また詩集『夜風』の一部もこの時期から制作が始まっている。

1924年夏には高長虹を中心に、高沐鴻、籍雨衣、張盤石といった文学青年が太原で“平民芸術団”を組織し、9月1日太原版『狂飆』月刊を創刊する。反封建反帝国主義を主旨とした“狂飆運動”の始まりである。

北京狂飆運動の開始

9月の末に早くも高長虹は北京に向かい、魯迅の知遇を得て北京での狂飆運動を展開する。一方高沫鴻は太原にとどまって狂飆運動を支援する。11月9日に北京『狂飆週刊』が創刊され、のべ17期発行されたが売り上げの落ち込みなどの理由から停刊となる。第14期に発表された「本刊宣言」によると；

“こうして数人が暗黒の中から目覚め、互いに呼びかけた・・・－そうだ、我らは立ち上がる。我らは呼びかける、期待に不安を持つ人々も立ち上がらせよう・・・－軟弱はいけない、眠りながら希望を持つのもいけない。我らは強者たらねばならぬ、障害を打倒するか障害に打倒されるか。我らは決しておびえず、逃げ隠れもしない・・・ひとすじの泉が大河の源流となり、ひとひらの木の葉の揺れが暴風の兆しとなるように、小さな始まりが偉大な結果を生み出しうる。こうした理由で、我らの週刊を狂飆と呼ぶことにした”⁷

この「宣言」からは“鉄の部屋”（『呐喊』『自序』⁸）から目覚め、周囲を巻き込み旧弊を打ち壊す嵐とならんと志した青年たちの意気込みを読み取ることができ、彼らの活動を五四運動以降展開してきた思想革命の流れの一翼として位置づけることができる。

『莽原』創刊

1925年4月、魯迅を中心に高長虹、尚鉞といった狂飆社系のメンバーと李霽野、韋素園といった安徽省出身の未名社系メンバーによって雑誌『莽原』が創刊された。社会批評と文明批評を旨とする本誌は中途から530事件及び女師大事件に関わる文章が多くを占めるようになる。狂飆社系のメンバーは主として評論と創作に力を発揮し、高長虹の連載エッセイ「弦上」を筆頭に、狂飆社全体でのべ83篇掲載された⁹。そのうち高沫鴻の作品も17篇¹⁰掲載されており、後にその多くが詩集『夜風』に収録された。

創刊当初から狂飆社同人と未名社同人との関係は悪く、しばしばトラブルが発生していた。その上両者の間を取り持とうとした魯迅の対応に不満を持った高長虹は、彼との関係も悪化させてしまう。

1925年10月、魯迅は『莽原』を半月刊に改め、高長虹に編集を任せようとしたが高はこれを固辞し、狂飆社は新たな活動拠点を探すこととなる。

『弦上』から上海狂飆運動へ

1926年2月14日、高長虹、鄭效洵及び高歌らは北京で『弦上』週刊を創刊する。本誌は北洋軍閥への批判や現代評論派との論戦などが誌面の多くを占め

ており、高沐鴻も“M”のペンネームで数編作品を投稿している。

4月16日、高長虹は『弦上』を高歌に任せ、鄭效洵と共に上海に赴き、新天地での狂飆運動展開を目指すのが、成果を出すことが出来ずに暫し停滞する。一方この年の夏、高沐鴻は武郷出身の進歩青年武靈初、李逸三らと太原で“星光社”を組織し、自らは社長に就任して、油印の小新聞『星光』月刊を出版した。紙面上ではもっぱら武郷の汚職官僚・紳士を批判し、当時の武郷県長呂紹岩の悪行を攻撃するなど現実の革命活動に注力している。

8月には『弦上』が24期を以て停刊となり、狂飆運動の中心は北京から上海に移動する。

10月10日、上海光華書局から『狂飆』週刊創刊号が発行された。巻頭の「狂飆週刊的开始」では；

「我らの重要な仕事は科学と芸術の建設であり、科学による思想の批評である。現在はやむを得ず、我らの副次的な仕事として新しい思想を以て古い思想を批判し、欧州の比較的進歩した科学と芸術を中国に紹介する。」

と宣言し、自らの方向性を示している。「科学と芸術の建設」というスローガンは、1919年に『新青年』誌上において陳独秀が提唱した“徳先生”（民主）と“賽先生”（科学）¹¹を彷彿とさせる。しかしながら、狂飆社同人が批判し乗り越えようとしたのは旧社会の礼教のみならず、狂飆社自身を生み出した五四運動期の思想も含まれていた。それは以下に触れる魯迅及び周作人との論戦の形を取って現れる。

周氏兄弟との論戦

『狂飆』週刊が創刊された1926年10月10日、高長虹は魯迅と韋素園に手紙を書き、これは「通訊」として『狂飆』週刊第2期に発表された。そこには『莽原』編集部内部のトラブルが書かれており、魯迅との衝突を明らかにするものであった。当初、未名社と狂飆社の対立として認識し、中立の立場を取っていた魯迅も、高長虹の「1925、北京出版界形勢指掌図」（『狂飆』週刊第5期）を目にして激怒し、12月10日、「所謂“思想界の先駆者”魯迅啓事」を『莽原』半月刊23期（後に『語絲』、『北新』、『新女性』）に発表して反撃を開始した。以後高沐鴻は「走到出版界」（『狂飆』週刊誌上に連載）、魯迅は「阿Q正伝」の成因（12月3日）、「走到出版界」的“戦略”（12月22日）といった文章を発表して論戦を展開する。魯迅の弟である周作人も巻き込んだこの論戦は、リーダーである高長虹のエネルギーの多くを奪い、狂飆叢書の出版を遅らせる

など、結果として狂飆社に大きなダメージを残すことになる。

そして1927年1月30日、『狂飆』週刊は17期まで発行され、経済的理由によって停刊となってしまう。

狂飆演劇運動と狂飆運動の終末

『狂飆』週刊停刊に先立つ1927年1月初めから3月にかけて高長虹は北京で資金集めに奔走し、太原に立ち寄って末弟高遠征、張盤石、高沐鴻、王玉堂ら山西の狂飆社同人を激励した。しかし6月から10月にかけて高長虹は杭州で療養生活に入り、狂飆運動は暫し停滞する。さらに同年秋、高長虹と高歌の弟である高遠征が南昌起義に参加して失敗し、南方へ移動中、敵に包囲されて犠牲となった。この知らせは高長虹、高歌兄弟を悲しませ、兄弟の不和を招く。この年の3月には高沐鴻の第一詩集『天河』が『狂飆叢書第三』の第二種として上海光華書局から出版されている。

1928年1月、前年から準備を進めていた『世界』週刊が創刊となる、出版元は狂飆社出版部となっており、メンバーの出資金によって運営されていた。4月には流通所も併設した狂飆社出版部が正式に成立し、狂飆運動の新たな拠点となる。9月中旬、高長虹の依頼を受けた高沐鴻が、太原から上海にやってくる。編集業務に加わり、前後して向培良、尚鉞、鄭效洵、段復生ら主要メンバーも上海に集結し、上海狂飆運動が再び活気を取り戻す。

10月には高長虹の個人刊行物である『長虹週刊』が創刊され、同時期に向培良を責任者とする狂飆社演劇部が成立した。11月には狂飆社出版部の資金集めが順調に進み、出版部名義で『狂飆叢書第一』、『狂飆出版物』、『狂飆刊集』といった叢書が企画され、のべ23種が出版された。

12月、停刊した『世界』週刊（停刊当時は月刊）に続いて『狂飆運動月刊』が創刊される。新加入の張申府が物理数学、陳徳栄が心理学、高長虹が経済・教育、柯仲平が詩歌、高歌が小説、向培良が演劇、高沐鴻が総編集を担当する総合雑誌であった。しかし翌1929年1月、編集担当の高沐鴻が上海での生活に馴染めず肺結核に倒れた。杭州での療養生活の後、6月に山西省武郷に戻ってしまう。高沐鴻は上海に滞在中、向培良の湖南の同郷の者をモデルに長編詩「湖上曲」を創作し、向が主宰していた上海『青春』誌上に発表した。同時に故郷の革命青年李逸三をモデルとした長編小説『少年先鋒』を執筆するなど旺盛な創作意欲を示している。また1929年1月には『狂飆叢書第二』第五種として第二詩集『夜風』が、5月には『狂飆叢書第二』第十種として小説『紅日』

がいずれも泰東図書局から、9月には『湖上曲』が上海南華図書局から出版されている。

数カ月にわたる準備の末、2月中旬に狂飆演劇部が上海で初めての公演を行った。続いて2月23日から3月初めにかけて南京での公演も行い、好意的な評価を得ている。しかしこの年の5月、演劇部門の責任者である向培良が、南京政府要人である潘公展の依頼を受け、『青春』月刊編集を担当するため狂飆社を離れてしまう。当時高長虹も不在であり、演劇部から主要メンバーが相次いで離脱した結果、事実上の活動停止状態に陥ってしまった。

6月、高長虹は北京での狂飆運動展開のため奔走するが、同月末に狂飆演劇部が資金難から解散となる。秋には狂飆社若手メンバーの王玉堂らを率いて北京、天津で演劇運動を展開しようとしたが資金難から挫折する。11月、上海に戻った高長虹は狂飆運動を立て直そうとしたが、メンバーは散り散りとなり、尚鉞、柯仲平ら残りのメンバーは既に共産党の地下工作に重点を置くようになっていた。

1930年年初、高長虹は日本に旅立った、これを以て全国から50名近いメンバーを集め、12種の刊行物をのべ100期あまり発行し、叢書4種のべ26冊という成果を残して狂飆運動は終わりを告げる。

4 狂飆社時代の詩作

本章では一旦時間をさかのぼり、高沐鴻が狂飆社時代に発表した詩集『天河』（1927年）、『夜風』（1928年）、『湖上曲』（1929年）を執筆年代順に分析していく。

4.1 『天河』

高沐鴻の第一詩集となる本作は、上述の通り1927年3月に『狂飆叢書第三』の第二種として、上海光華書局から出版された。「天河」（26章）、「蜜月」（24章）、「秋雨」（40章）の3部からなり、のべ90章にも及ぶ一大長篇詩である。

執筆自体はかなり古く、「天河」は1924年の2月初めから6月末にかけて、「蜜月」は7月20日から8月28日にかけて執筆されている。「秋雨」には日付が付されていないが、「序」および「再序」は翌1925年3月に執筆されていることと内容から判断して1924年の秋から翌25年の春にかけて書かれたものであろうと推測される。

前節で紹介したように、この時期高沐鴻は太原に在って小学教師の仕事に従

事する傍ら、高長虹の影響を受けて文学創作を開始している。また、高長虹たちとともに狂飆運動を立ち上げ、高長虹が北京に活動拠点を移してからは太原に留まって『狂飆』月刊の発行責任者を担当している。さらにこの時期、高沐鴻は農家の娘 李冰花と結婚していることから本作には彼自身の境遇が反映されている部分もあると考えられる。

冒頭に付された「序」では、天の川が愛し合う男女を荒波で阻み飲み込もうとする障害物として描かれ、「不人情」で「残忍なペテン師」に勇気を奮って彼女のもとに向かうよう叱咤する。そして続く「再序」では、この詩集が「飾り珠の袋」の中に「私の抜け落ちた髪と歯、血と脳髄、そして涙と唇」「砕けた私の心」が詰まっているものであり、これを「最愛の人」に差し出したものである、と述べており、読者への一種の解題となっている。

● 第一部「天河」

本作は基本的に「我」が「我が愛する人」に呼びかける形をとるが、冒頭においては「天」・「天帝」といった超越的な存在への問いかけと祈りが目につく；

「私は言いたい、如何に悲哀から抜け出そう？ 人類はどれほど憐憫に堪えたのだろうか？」（「天河」第1章、以後天1）¹²

「無限の苦痛が続く宇宙の滑稽劇を、あなたの腕の中から片づけてしまってくれ。これ以上意義のあることもあるまい！ 天帝よ、どうかこの滑稽劇に收拾をつけてくれ」（天3）¹³

こうした卑小な存在である人間の悲喜劇を神は劇でも鑑賞するかのように見下ろし、決して介入することは無い、という世界観・宇宙観は、前章で紹介した『新詩集』においても見出されたものである。こうした理不尽、無情な世界に在って、「我」は「我が愛する人」との恋を歌う；

「我」は囚われの愛する人を籠に囚われた「孤高の奇鳥」（天6）¹⁴、「砂塵に巻き込まれた」（天7）¹⁵ 存在に例え救い出そうと試みるが、父兄が司る封建的な婚姻制度が二人の間に立ちふさがる；

「我が愛する人よ！ 誰かがもたらす贅沢な、眼もくらむほど華やかな嫁入り道具は、本当にあなたの軽蔑の眼差しを得られるのだろうか？ - だが何故あなたは幸せそうにそれを受け取るのか？」（天8）¹⁶

「‘婚姻は父兄が主宰する’ あなたは嘗てこんなふうに分の神聖なる心に尋ねたのだろうか？」（天10）¹⁷

そして「我」は愛する人に以下のような神への祈りをささげるよう勧める；

「我が心から愛する人よ、私は彼の胸懷に飛び込みたい；だが我が父我が兄は、獐猛な怒りを持ち、頑強な縄を用いて、我が翼を絡め取り折ってしまったのです！」(天 11)¹⁸

“母よ！あなたは私の言葉をちゃんと聞いていますか？あなたもまさか我が父兄のように私を奇貨と思っているのでしょうか？そして自分で値を付け、彼らの一生涯にわたる吝嗇の代償としたいのでしょうか？あなたは黙って何も言わないが、私はあなたの肉親ではないのですか？あなたは自分の股ももから、肉を切り取り、細切れにして人々に食べさせるのですか？—しかし私はこの無茶な命令に従うことができるでしょうか？”(天 11)¹⁹

“私は自分の心に従い、この食人の家から脱出することを求めるでしょう！私は彼から飛び立ち、飛び去り、走り去る・・・私は家庭の幽霊たちの宴席に待る召使の職務にはもう我慢がならない(天 11、傍線は筆者)²⁰

魯迅の「狂人日記」における“食人”のテーマを想起させるこの祈りは、封建的婚姻制度の犠牲となることを良しとせず、自由な恋愛と婚姻を切望する当時の若者たちの姿を読み取ることが出来る。

「我」は、一度は「私たちはもう永遠に顔を合わせる時が来ないかも知れない！あなたは強者に奪われ、私には彼らの虎狼のように凶暴な手から愛を取り戻す力はない！」(天 12)²¹ と自らの無力を嘆き悲しみ、死さえも夢想するが、遂には苦難を乗り越え、二人は結ばれる；「私の両手はあなたのほっそりした指を捕まえる。あなたの楕円の瞳は愛の神秘を溢れさせる」(天 18)²²

しかし愛を成就させた二人に周囲の眼は厳しく、「我」は家族を守るため戦う決心をする。

「誹謗中傷が沸き起こり、針の席の如く刺し、私たちは満身創痕となる。憐れ深窓の令嬢は、この重い傷を受けて、呻吟する、私を恨むか？我が愛する人よ！世界がもしもあまりに仁愛に欠けるのであれば：私は刃を手に突進することも辞さない、小悪党どもは見るやこそこそ逃げ隠れするだろうが、私はこの時ばかりは弱者ではない！」(天 24)²³

だが、この周囲の無理解と戦うという決心は、一方で人々を救うという自らの使命との間に葛藤を生み、さらに自身が生きていくための衣食の問題を解決するために群衆に降伏すべきかどうか迷いもする；

「私は自分の使命を捨て去り、人類を狂わせたままにしておいて、私自身

も狂った群れの中に沈んでいくのだろうか？衣食よ！衣食よ！人の死生を握る毒物よ！私はこのために有力者に諂いの笑みを浮かべるのか？－私は一人ぼっちで群衆の口舌に包囲されていたのだ！早く悔いて、這いつくばり赦しと憐れみを乞うべきなのか？」(天 24)²⁴

遂に「我」は「憎悪と排斥の群衆の嘲笑」(天 25)²⁵から逃れ、「愛よ！私は揺るがず恋を正義としよう」(天 25)²⁶と恋愛に至上の価値を置くことを決意した。そして「あなたたちの聡明なる奴隷根性は、私に犯罪者の汚名を着せずにはいられない；だがあなたたちは自ら望んで無限の中に囚われた真実の罪人だ！」(天 25)²⁷と人々の封建的礼教にとらわれた精神を批判し距離を置く。

こうして俗世から逃避し恋愛を選んだ「我」は手放して「愛する人」を賛美し、第1部を結ぶ。

私は何万ものことばから、あなたを賛美することばを見つけられない、愛よ！あなたは何と謎めているのか！私は筆を何時手放せばいいのだろうか？(天 26)²⁸

● 第二部『蜜月』

第二部冒頭において「我」は、「ふらりと私は芳しき草花生い茂る洲に上るが」(『蜜月』1章、以下 蜜 1)²⁹り、「ああ！私は何故咲き誇る花を前に居座ってしまったのか？」(蜜 1)³⁰と幸せな生活に溺れたことを嘆く。そしてさらに彼を嘲笑う「仇敵」にも「弱弱い笑みを浮かべる力しか残っていない」(蜜 1)³¹と自身の軟弱を憂う。そして「我」は「この場所で死に、愛の偉大さと傲岸さを成就させよう！」(蜜 1)³²と誓う。

『蜜月』と題されるこの第二部においては、愛する人との夢のような日々に在って「私」が汚れた肉体を棄て去り、精神のみの存在となる描写が繰り返される：

「彼女は精霊だ！渦巻く大海原の精霊だ！汚らわしいものも、その清浄のうちに堕ちて洗い流されないことがあるだろうか？私は忽ち禽獣のような心と皮膚を脱ぎ去り、清潔な骨格のみを残して、愛の神の玉座の前に奉げる。」(蜜 7)³³

「私はぐったりとして低い声で詠う。既にやっかいな形体を脱却し、重くのみしかかるような喘ぎ声を棄て去った」(蜜 9)³⁴

「我が魂はふわふわと心の門で様子を窺い、ほんやりした眼差しであなたを見つめる。羞恥心を忘却したかのように、私は薄汚れた肉体を棄て去っ

た」(蜜 11)³⁵

そして肉体を棄て去った「私」の心は愛する人と一つに溶け合い、理想郷で蜜月を過ごす；

「私は知っている、ふたつの心は肉体の隔たりを消し去って、相思相愛の抱擁の中溶け合って一つになるだろうことを」(蜜 13、14)³⁶

「手を繋ごう、我が最も愛する人よ、二人で羽化登仙し、悠々と生きていこう！」(蜜 18)³⁷

● 第三部『秋雨』

周囲の批判を無視して一つに溶け合うような蜜月を過ごした二人にも別れのときが訪れ、「私」は「あなた」のもとを離れざるを得なくなる；

「同居の艶やかな夢は破られた！愛する人よ、我らは二羽の愚かな小鳥のようだ；獵師がすでに樹下に待ち伏せているというのに、我らは依然として樹上にぐっすり眠っている。切々と我らが恋の詩を読んでいる間に、弓弦に引き絞られた石つぶてが我らの安住の巣を破壊しているはどうして知れよう？・・・」(秋 1)³⁸

愛する人と別れ、異郷に暮らす「我」は別離の寂しさに苦しみ憔悴する；

「我が壮健なる肉体は、別離に消耗し、物思いに侵食された、一輪の花が次第に憔悴の色を見せるように、愛する人よ！花がいつ萎れるか知っているか？・・・」(秋 8)³⁹

「我」は自身の事業に専念し、責任を果たそうと試みるも、「あなた」への愛に囚われ、身動きが取れない状況に苦しむ。

「私の頭がぐらぐらと痛み、私の神経は何時までも病んでいる。健全な事業と責任の道が、私の足取りを後押しするが、しかし私は自由に行くことができない。私はあなたの奴隷—あなたの命令を待つことも無い自薦の奴隷だ・・・」(秋 9)⁴⁰

そして「“この山北の厳寒の冬は、何時になったら終わりを告げるのだろうか？冬に従属する賤しい我が心に、帰郷の日は来るのだろうか？”」(秋 21)⁴¹と帰郷の日を待ち望む「我は」、遂には自らの使命を「つまらない」と見下し、「あなた」との愛こそが貴重なものであると悟る；

「私は愛を手に入れた。愛以上に貴重なものがあるだろうか？そして私が担っているものは何だろう？つまらない、つまらないものだ！私はつまらないもののために我が靈魂の光を損なうことができるだろうか？」(秋

24)⁴²

「あなた」との愛が自らの使命に勝ると気づいた「我」は二人の馴れ初めを思い出し、「あなた」を置いて異郷に出て糊口をしのいでいる現状を悔いる；

「どうして私はあなたを異郷に捨て去ったのか！私は悪人だ！糊口をしのぎたいだけの悪人だ！私は愛との同棲に在っても貧困を忘れることができないのか！？・・・」(38)⁴³

そして最終章にて二人は再会し、永遠の愛を互いに誓う；

「おお、我が愛する人よ！別離の時は長かったが、^{あいまみ}相見える日がやってきた。あなたはどれほど喜ぶだろう？帰宅の朝、突然の再会に、あなたは恥らうだろうか？」(秋40)⁴⁴

「全てが、あなたの追憶を経て霧散し、麗しく穏やかで光に満ちた世界の幕が、忽然としてあなたの前に下された。あなたは愛する人の姿を携え、ふわりと飛翔し旋回し、喜び笑い歌う；山の端河水の果てを経ても、あなたは決して愛する者を手放さない。」(秋40)⁴⁵

『天河』は、標題からも明らかなように天の川に引き裂かれた牽牛織姫の物語を下敷きにしている。歌い手として登場するのは自我に目覚め近代に生きる若者「我」であり、封建的婚姻制度の重圧をはねのけて愛する人と結ばれ、一度は生活苦からの別離を経験するも愛情こそが何にも勝る至上のものであると気づき、妻への愛を貫く姿が描かれている。

但し本作の特色はこうした単純化されたストーリーには収まりきらない過剰なまでの叙情性にあり、執筆当時、結成したばかりの狂飆社の主張にふさわしい情感の嵐とも呼ぶべき作品となっている。

本作と同様の傾向を持つ作品として、後年、『新生命』創刊号及び第2号誌上(1928年1月、2月)に発表された「破滅之前」を挙げることができる。

4. 2 『夜風』

高沐鴻の第二詩集となる本作にはのべ61篇収録されており、そのうち最後の17篇は3.1で言及したように『莽原』週刊及び半月刊に発表されたものである。1928年上海大図書館から発行され、1929年1月、狂飆社叢書第二の第五種として上海泰東図書館から再版された。

執筆年代としては「孤独」が最も古く(1923年7月27日)、他にも「墮落」(1923年9月23日)、「不朽の我心」(1924年7月6日)があり、1924年初めから執筆された『天河』よりも古いものが含まれている。『莽原』週刊及び半

月刊に発表された作品は25年5月から26年7月にかけて執筆、掲載されたものであり、冒頭に掲載された「海天的頌」及び表題作「夜風」は26年5月の作となっている。『天河』が24年2月から25年3月にかけて制作されたことに鑑みると、年代不詳の39編は『天河』と並行して、あるいは『天河』制作後の25年春から26年7月にかけて制作されたとみるべきであろう。

この時期高は引き続き太原一師附属小学校において教鞭を執る傍ら、北京で狂飆運動を展開しつつあった高長虹に代わり太原における狂飆運動を維持していた。後に「青年の苦悶を描いた」⁴⁶と自ら回想したこの『夜風』は長編詩であった『天河』とは趣を異にし、1923年から26年にかけて制作された短編詩を編集したものである。李東光1992においては青年の苦悶と希望・革命ロマン主義の影響が指摘されている⁴⁷が、論者は本詩集所収の作品をさらに①自我の苦しみ、②自伝、③恋愛と闘争、④反封建・思想革命、⑤自然賛歌といったテーマに細分することができる、と考えた。以下各テーマに沿って見ていこう；

① 自我の苦しみ

『新詩集』において初めて見出された「我」は、青年らしく大自然の美しさを称賛し、社会の矛盾に憤る。続く『天河』においては、封建社会との闘争を経て愛する人との自由な恋愛関係を勝ち取る存在として登場した。本作『夜風』に至って「我」はその眼差しを自身に向けはじめるが、その行為は絶望と苦痛を自身に齎すこととなる；

「没有主宰」

没有主宰在我的身上呵……
 在我眼前，花散地只有？，？，？……
 我的心，呵，力呵！似乎鸟一般飞
 去了，在我长途的搏击里。…
 我望着乌有，无声地叹息着。
 我期待什么。
 （以下略）

「主宰者がいない」⁴⁸

我が身には主宰者がいない……
 目の前で、四散して残るは？、？、？……
 わが心、ああ、力！鳥のように飛び
 去った、長きにわたる我が闘争のう
 ちに。……
 私は烏有を前に、声無くため息をつ
 く。
 私は何かを期待している。
 （以下略）

「我」は自身を司る存在「主宰」が長きにわたる闘争の末、消え去ってしまい、今や何も残っていないという事実苦しむ。また、「切り裂こう！どうかこの苦痛と隠匿に満ちた胸を切り裂いてくれ！」⁴⁹と自らのうちに抱える激しい苦

痛を訴えもする。

「无题（二）」

“漂流”送去我半世纪的韶华。生命好像一片秋天的落叶似的；“死亡”初次蒙着朦胧的面具，走上我的跟前，要求我把爱还给它。

它说：“死是一件珍异的快乐。”我了解它的话。我开门望着薄暮的生涯，那重重娇丽的云霞正织着幻灭的华严的幕。

呵！我所爱的，我将去了！躯壳被火焚成灰烬后，我的灵魂，便灭落到云天的一角。

このように「我」は死の誘惑に屈し、肉体も靈魂も朽ち果てることを自ら望むにいたる。そしてこうした傾向は「祝死」（執筆年不詳）などにも見出すことができる。

② 自伝的

上述のように、『夜風』において「我」は自身の苦悩や死への憧れを歌い始めるが、「我」自身に言及した作品の中には、高沐鴻自身の来歴が反映されていると思われるものも登場する：

「命运」（摘录）

我的三个弱小的妹妹，她们被慎重地从死的父亲的手里交给我。当我被戏弄于命运时，我觉得她们的生存太不值了！—怎地她们能再安睡进母亲的腹中呢！

一个弟弟失落在荒野，谁和他同声叹息呢？我为甚么生存着忍着命运的玩弄，睁睁地看他失所流离呢？

「無題（二）」⁵⁰

“漂流”が我が半世紀の年月を運び去った。生命はひとひらの秋の落葉のようだ；“死亡”は初め朦朧たる仮面を被り、我が眼前にやってきて、愛を返すよう要求した。

“死亡”は言う：“死は珍奇な快樂だ”と。私は彼の話を理解した。門を開け薄暮の空の果てを望む、その重々しく麗しい雲は幻滅の莊嚴なる幕を織りなす。

ああ！我が愛するものよ、私は去ろう！肉体が火に焼かれて灰となったあと、我が靈魂は雲の一角に墮ちていくことだろう。

「運命」（抜粋）⁵¹

我が3人の年端もいかない妹たちは、死にゆく父親の手から私に渡された。私が運命にもあそばれたとき、私は彼女たちの生存に価値を見出せなかった！—どうして彼女たちは再び母親のおなかの中に戻って安眠できないのか！と。

弟は荒野に墮ち、誰も彼と共にため

息もついてくれない。私はどうして生きて運命の玩弄に耐え、目を見開いて彼が居場所を失い流浪するのを目にしなければいけないのか？

山西第一師範在学中の1922年に父親が亡くなり、高は若くして家長としての責任を背負うこととなる。またこの年、高は習作集『新詩集』を編み、詩人としてのスタートラインに立っただけでいる。この芸術と生活の両立という課題は、家族を捨て芸術に没頭する青年を詠った「墮落」（1923年）、過ぎ去りし青春を惜しむ「不朽我的心」（1924年）といった作品にも反映されている。

③ 恋愛と闘争

前作『天河』においては、近代的な自我に目覚めた「我」が封建的な婚姻制度に抗い、自由な恋愛を勝ち取るまでが描かれていた。『夜風』にも「愛後」（執筆年不詳）⁵²、「石像」（執筆年不詳）⁵³といった同様なテーマを扱う作品が存在するが、その在りようが些異なるものも登場する。

「遠別」という作品において「我」は、恵み豊かな自然を隣人に持ち、愛する人との生活にも満たされているにも関わらず、“群鬼”や“強賊”に平穏を乱されることに我慢ならず、次のように決意する：

那么，我的心哟，你便别我远去吧；
你便舍去你的爱与嘉邻，
决然奋争去吧！
将你的首级，贡献于战神；
那是名贵的死灭呵！那是名贵的生存！

ならば、わが心よ、お前は私から離れて遠くへ去れ；お前はお前の愛と良き隣人とを棄て去り、
決然として勝ち取りにいけ！
お前の首級を、戦いの神に捧げよ！
それは名誉ある死だ！それは名誉ある生存だ！⁵⁴

と一度は封建的倫理と戦って手に入れた愛情と安逸な生活を捨て、再び闘争に身を投じる決心を表明する。

上記①～③の主題の作品群は、「墮落」（1923年）、「不朽的我心」（1924年）といった初期のものを含み、『新詩集』、『天河』とも共通するテーマを扱っている。続く④の主題においては、1925年以後、『莽原』に投稿された比較的後期の作品が多くを占めるようになっていく。

④ 反封建・思想革命

この主題の作品が『夜風』において最も数が多く、全体の3分の2（39篇）

を占めている。また、年代的に最も早い「孤独」(1923年)と年代不詳の18篇、そして1925年以降『莽原』及び系列誌に投稿されたものが20篇含まれており、分量的にも年代的にも本詩集全体を貫くテーマであると言ってよい。

まず年代的に最も早い「孤独」を見てみよう。

「伴侶」を求めて「森」を駆け巡る少年「我」に対して、師である「伝道師」は次のように忠告する：

“那么，少年，这是个至理：谁都
唤不醒善睡的人—你忍着再走一躺
去罢！”

“ならば、少年よ、これこそが真理だ：
だれも熟睡している人を呼び覚ますこ
とはできない—あなたは我慢して再び
もう一走りしてきなさい！”⁵⁵

その後「伴侶」として求めた「少女」たちに拒絶され、失望して戻ってきた少年に対し、「伝道師」は嘗て「森」で起きた出来事を語って聞かせ、何故少年が拒絶されたか教える：

“这里曾作过一次战场，
许多的少年骑士，
都埋藏在森林底脚底。”
“为什么你们战争呢？”
“这许是番‘老’与‘少’战争：
当这般少年底威力，
震动了这所森林时，
老人们都避入城中去了；
终于得着皇帝的帮助，
带来精练的军队，
把他们！少年！尽数坑在森林
底脚底！”

“ここは嘗て戦場だった、
数多の年若い騎士たちが、
森林の底に埋められている。”
“どうしてあなた方は戦争したのですか？”
“それは‘老’と‘若’の戦争だったのだ
ろう：
少年たちの力が、
この森林を震わせたとき、
老人たちは城内に逃げ込んだ；
ついには皇帝の援けを得て
精鋭部隊を連れてきて、
彼らを！少年たちを！ことごとく森林の底
に穴埋めにしてしまった！”

過去の老人と若者の戦争の結果、「皇帝」によって若い騎士たちは虐殺されてしまい、少年たちは老人たちによって従順な生き物に変えられてしまったと聞いた「私」は、自身が騎士と同様に忌避される存在であることに気付く。

本作における「教士」は魯迅たち思想革命の先導者、「伴侶」はともに戦う仲間であろうか、人々から孤立しても旧体制と戦う騎士たらんとする青年らしい気負いが読み取れる。

2年後の1925年春、第2章においても言及したように、北京において高長虹が魯迅とともに『莽原』（週刊）を創刊すると、高沐鴻の作品も数多く誌上に登場するようになる。1925年6月5日発行の『莽原』7号冒頭⁵⁶に掲載された「血的言語」（ペンネームはHF）では；

待我们这般叛徒，给你们争夺，代替你们死，你们只坐着，待着，享受一奴隶我们，大众！

我らのような叛徒を、あなたたちのために奪い合わせ、あなたたちの代わりに死なせる、あなたたちはただ坐って、待ち、我らを奴隷として享受する一大衆よ！

このように、「我ら」を代理人として争わせ、死に至らしめ、奴隷扱いする存在として「大衆」が登場する。そうした「大衆」に対して「我ら」は自らを「火山」や「海」、そして地球を「焼野原」に変える「火」に譬えつつ次のように呼びかける；

打你一个耳刮子，恼吗？其实便割下你的头来，又值什么？你的头颅，实在太成熟了！—承认我们，大众！

咕咕啾啾和平的鸽子！让我给你“打食”，你只待着吃，一然而你不必再歌唱了一期待我们，大众！

あなたの横っ面をひっぱたいたら、怒るだろうか？実際のところあなたの首を切り落として何になる？あなたの頭蓋は成熟しすぎている！—我らを認めよ、大衆よ！

ぶつぶつぶやく平和のハトよ！私に“餌を漁”らせてくれ、あなたはただ待ち喰えばよい。だがあなたはもう歌う必要は無い—我らに期待せよ、大衆よ！

「横っ面」を叩き、「首を切り落として」も「成熟しすぎ」た「大衆」には意味が無い、と突き放した物言いをしながらも、「認め」られ、「期待」されることも望む心情が窺える。

また、1925年7月17日発行の『莽原』13期⁵⁷、これも冒頭に掲載された「異床同夢」（ペンネーム成均）では、皆が不満と憤りを抱えつつも自分の隣に勇敢な戦士がいて何とかしてくれるはず、と妄想し続ける無責任な状況に異議を唱えて；

哎！醒醒吧，睡熟的！复活吧，死

ああ！目覚めよ、深く眠れるものたち！復活せよ、死せるものたち！あな

了的！你自己的床外，没有更勇的人，你自己的步前，没有先走的人！你自己最有力，最能接受力，你自己便是劲敌的劲敌！……

且起来打破这异床同一的愚弱的梦，建设你自己！

创造者眼中唯有“我”！

超人的手，造出伟大无私的幸福！

た自身のベッドのほかに、勇士はおらず、あなた自身の歩みの前に、先に行く人はいない！あなた自身が最も力を持ち、最も忍耐力があり、あなた自身が強敵の強敵なのだ！……

起き上がってこの愚劣な異床同夢を打ち破り、あなた自身を建設せよ！創造者の眼中にはただ“私”がいるのみ！

超人の手は、偉大にして無私の幸福を作りだす！

あなたこそが戦士なのであり、率先して目覚めるべきだと呼びかけている。「あなた自身の歩みの前に、先に行く人はいない！」の詩句は魯迅「故郷」の結末「思うに希望とは、(中略)それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」⁵⁸を想起させる。

また「超人」といったキーワードからは、魯迅も傾倒したニーチェの超人思想の影響が感じられるが、この超人を連想させる人物は「城頭」（『莽原』1925年9月4日20号）、「力的欠乏」（『莽原』1925年8月14日17号）、「幻境」（『莽原』1925年11月20日31号）にも度々登場する。

しかしこの「大衆」を目覚めさせ、導かんとする「戦士」たちの声は響けども伝わらない。1925年5月29日発行の『莽原』6号⁵⁹掲載の「声的歴史」（ペンネーム高成均）では：

呐喊原是站在圈外着的勾当！他们披着勇士的盔甲，摇旗擂鼓，这已够十分血气！“他们知道仇敌会被吓死么”？这虽不易揣摸，但看他们得意地在做作，或者会收风声鹤唳、草木皆兵之效！

呐喊はもともと傍観者の芸当だった！彼らは勇士の外套を羽織り、旗を振り太鼓を打ち鳴らした、これだけで十分に血気盛んだ！“彼らは仇敵がびっくりして死んでしまうと知っていたのだろうか？”これは簡単に推測できるものではないが、彼らの得意げな様子を見るに、或いは風に怯え草木も兵に見える効果はあったかもしれない！

勇ましい「呐喊」の声は空しく響いた後何も起こらず、叫んだ人々の自己満足しか残らなかつたと批判し、実行を伴わない声は無用の長物に過ぎないと切り捨てる；

请勿再取那虚弱的声音，易以你的生命与脑与手足！一部声的历史，完全是无用的虚文！

どうか虚弱な声を用いて、あなたの生命と脳と手足に換えようとしなくてくれ！声の歴史は、完全に無用の文である！

上記に共通するのは人々の目覚めを促す存在としての自覚である。「孤独」(1923年)において自身が旧体制と戦う「騎士」の一員であることに気付き、そして『莽原』を舞台に「大衆」に眠りから目覚めよと呼びかける。しかしその呼びかけは届かず、時に「大衆」への苛立ちを隠しきれない。

しかし1926年7月25日発行の『莽原』半月刊14期に掲載された連作詩「野火」の中の1篇「寄独夫」では；

「本来この国土には、小さな旋風があつた程度で、天地を揺るがす暴風にはお目にかかつたことが無い。我々はせいぜい集まって送風機を回し、風の勢いを強くしているだけで、風の下、敵を殺戮することなどではしない。だが風に勢いを与えていることは、十分我々の一生の慰めになっている。

風と炎が巻き起こる日は、我々の最後の日だ。たとえ世界の火種が、我々の一生の間に集まらなかつたとしても、我々はそれぞれ大きめの野火を放ち、最後の日に、記念として留めるだろう。

こんな風に自分を慰めよう！我々の世界には、ひょっとしたら何千何万年後の子孫の世界には、と；だが我々の炎が痕跡をとどめることにより、我々は依然として生きている。このように我々は意義もなく対価もないことをやり続ける。」⁶⁰

今は小さな旋風に過ぎず、敵を倒すことは出来なくとも、いつの日か風と炎が世界を席卷する日が来ることを夢見て、「意義もなく対価もないことをやり続け」ていこう、と自らの無力を認めつつ微かな希望を胸に未来に目を向けるようになっている。

本作は26年3月12日に執筆されており、この時期、狂飆社を取り巻く環境に大きな変化が訪れようとしていた。三章においても既に触れているが、ここで改めて状況を詳述する。

1925年10月、『京報』は全ての副刊の発行停止を決定し、それに従い『莽原』

は同年 11 月 27 日発行の 32 号を以て停刊となる。翌 26 年 1 月から発行予定となった『莽原』半月刊は、魯迅、韋素園、韋叢燕、李霽野、台静農及び曹靖華ら 6 人によって結成された未名社が中心となって編集を担当することになり、魯迅は引き続き高長虹に編集に参加するよう求めた。しかし未名社の同人とかねてより対立していた高長虹はこれに同意せず、狂飆社同人は新たな活動の場を模索し始める。

1926 年 1 月 10 日に『莽原』半月刊が、続く 2 月 14 日には狂飆社の刊行物である『弦上』が創刊され、狂飆社同人には新たな活動の場が用意された。但しこの時点では、狂飆社同人は作品を『莽原』半月刊にも投稿しており、魯迅と完全に決別したわけではない。

しかし、『莽原』週刊紙上では魯迅たちと同じ隊列に加わって旧体制に抗い、大衆に目覚めを呼び掛けていた戦士は、「寄独夫」において当事者の立ち位置から距離を置いて未来に思いを寄せている。ここからは狂飆社同人、少なくとも高沫鴻の魯迅との別離、あるいは彼からの自立の萌芽を読み取ることができる。

⑤ 自然賛歌

『夜風』収録作のうち、「海天的頌」（1926 年 5 月 18 日）、表題作「夜風」（1926 年 5 月 30 日）、「海上的春」（執筆時期未詳）の 3 作には、雄大な自然を舞台に前向きかつ伸びやかな情感が描かれており、戦闘的なメッセージが多い本詩集に在って異彩を放っている。とりわけ「海天的頌」、「夜風」は執筆年代が最も新しく、表題作にもなってもいることから高沫鴻の何らかの意図が込められているものと思われる、以下に紹介していこう。

まず、「海天的頌」では：

幻的天，演变着。生的奋进呵！
波的海，冲击着。生的鼓动呵！
微渺的虫壳，你跳动呵！你跳动呵！
应和着。伟大，投入伟大的怀。
搏击呵！你的长翅；
跳跃呵！你的心粒；
拥抱着：幻的天，波的海，
亲吻着伟大去呵！

幻の天空は、変化を続ける。生の前進だ！
波立つ海は、ぶつかり合う。生の鼓動だ！
微細な肉体よ、跳ね回れ！跳ね回れ！
呼応せよ。偉大な、偉大な懐に飛び込め。
羽ばたけ！あなたの羽根；
跳躍せよ！あなたの心；
幻の天空と、波立つ海を抱きしめて、
偉大なるものに口付けしながら行け！⁶¹

この冒頭のフレーズは末尾においても繰り返されており、作中では天空と大海原の雄大かつ壮麗な情景を描きつつ、「天空の星たちの中に／海の波の中に／光と愛と力の中に／有るのは；歓喜に、興奮！情熱に、震撼・・・／寂寥と孤独は死んだ；黄昏も無い。／歓喜に、興奮；情熱に、震撼・・・／この栄光ある贈り物は／あなたに受け取られようとしている；飛翔のうちに、前進のうちに／飛べ、心よ！／前進！前進！前進！」⁶²と興奮・情熱・震撼を求めて前進せよ、と呼びかけている。

また、本詩集の表題作である「夜風」では、「不滅の擾乱者」たる夜空に吹き荒れる強風に思いを重ねた詩人が、共に夢と美と真実を追い求めんとする；

我把风捉在心头，
我的心也禁不得哀哀地吼，
夜的风呵，痛的心呵，
你们是不灭的烦扰者：
梦的，谜的，追求的爱侣，
美的，真的，音乐的后都。

私は風を心に捉えた、
わが心も切々と吼えざるを得ない、
夜の風よ、痛ましい心よ、
あなたたちは不滅の擾乱者；
夢の、謎の、追及の伴侶にして、
美の、真実の、音楽の都だ。⁶³

そして夜風と同化した詩人は星々の煌めく天空を吹き抜け、「あなたの王国」に渦巻き、心の中の火を煽って天地を焼きつくそうとする；

那星光祇闪烁地射在天表，
爱光的人，仰着头赞美着伊；
我大力的风呵！
卷向你的王国去吧！
爱你的人，会塔上你的长翅。

有什么的火在你心中燃烧呢？
为了甚么，你哭泣着不止？
但是去吧，风追求你个人的去
吧—
否则掏出火来，
烧个红天白地！

かの星の光は燦然と天空の外に射し、
光を愛する人は、仰ぎ見てそれを賛美する；
我が強力なる風よ、
あなたの王国に向けて渦卷け！
あなたを愛する人は、あなたの長い翼に乗ることだろう。

どんな火があなたの心の中で燃えているの
だろう？
どうして、あなたは泣き止まないの
だろう？
しかし行くがいい、風はあなたを追って
いこう—

さもなくば火を取り出してきて、
天地を焼いてしまうだろう！⁶⁴

『新詩集』における自然の発見とは異なり、「海天的頌」において詩人は天空と大海原を縦横に駆け回り、また「夜風」にあっては強風と同化して世界を席卷し、炎で焼き尽くそうとするなど、単なる自然賛歌にとどまらず、そこには詩人の寓意が織り込まれている。

また「夜風」に登場する炎と風というモチーフは、上述の「野火」においても登場している。これは世界に嵐を呼び、炎を上げようと目論む彼らの狂飆運動自体を暗示しているものと読み取れるが、「夜風」の姿勢の方がかなり前向きである、この変化は何に起因するものであろうか？

「海天的頌」、「夜風」が創作された当時、狂飆社は魯迅及び未名社から距離を置いて『弦上』という新たな発表媒体を手に入れており、高沐鴻も太原の地から作品を投稿していた。さらに1926年4月16日、高長虹と狂飆社同人鄭效洵は新天地上海に赴き、これ以後、狂飆運動の中心は北京から上海に移ることになる。

こうした背景から、「海天的頌」、「夜風」二作には新天地に赴く狂飆社同人を鼓舞し、狂飆運動の発展を願う思いが込められていたと考えられる。

このように、高沐鴻の第二詩集『夜風』は、1923年から1926年にかけての作品を収録しており、狂飆運動前半の作者の関心の変遷をおぼろげながら辿ることができる；はじめは“自我”，“自伝的作品”，“恋愛と闘争”といった『新詩集』から『天河』において中心となっているテーマの作品が多くを占め、次第に『莽原』に掲載された“反封建・思想革命”の主題を明確に打ち出したものが多く登場するようになる。そして最後に魯迅からの自立と新天地での発展を高らかに宣言して詩集をまとめている。

4.3 『湖上曲』及び上海『狂飆』週刊誌上の作品

高沐鴻の第三詩集となる本作は、1929年9月に上海南華図書館から出版されている。執筆は上海滞在中の1928年9月のことであり、狂飆社同人向培良の同郷の者をモデルに創作され、向培良主宰の雑誌『青春』誌上に発表された。22章構造、『詩文集』100頁を占める一大長編詩である。

第3章でも既に言及しているが、ここで改めて高沐鴻個人の動向に重点を置いて当時の状況をみておこう；

「海天的頌」、「夜風」執筆後の1926年夏、高は武郷の知識青年たちと星光社

を結成し、新聞『星光』を創刊して武郷の汚職官僚や顔役を批判するなど、現実の革命運動に従事し始めた。この頃、狂飆社の媒体であった『弦上』が24期を最後に停刊し、狂飆社の活動の中心は完全に上海に移ることとなる。10月10日に数カ月の準備期間を経て上海『狂飆』週刊が創刊され、同時に高長虹と周氏兄弟との論争が始まるが、この論戦は狂飆社リーダーである高長虹の精力の大半を浪費してしまう。経済的理由もあって1927年1月に『狂飆』週刊は停刊となってしまうが、高沐鴻はこの上海『狂飆』には「最後の憑依」、「在隧道中」、「漂泊者の放吟」、「狹的囚籠」などのべ10篇の詩、散文、小説を発表している。この「最後の憑依」は1926年10月17日発行の『狂飆』週刊第2号に発表されており、自由意思を何よりも尊重する「私」は：

「主よ！私から離れないでくれ；あなたの最後の教えが欲しい、私の最後の
 抛り処を！この暗黒と渺茫が占領した恐るべき忌むべき世界に在って。」⁶⁵
と「主」なるものに「最後の抛り処」を懇願してそれを与えられる、そして；
「神は我に与えたもうた；あの最後の永久の抛り処を！／私は人道の説教師
 に、妙訣奥義の鐘となろう／私は精神界の戦士、暗殺団の首領となろう／私
 のことばは河の流れのように世界のうちに沁みこんでいこう」⁶⁶
と“人道の説教師”・“精神界の戦士”になって自らの言葉を広める、と宣言している。本作は李緒珍・韓国鋒1992において「象徴主義の手法を応用して革命への激情を表現した」⁶⁷と評されているが、確かに『夜風』において頻繁に登場した反封建・思想革命のテーマに宗教的色彩が加わり、『新詩集』で登場した上位の存在も連想させる独特の作品となっている。

26年冬には星光社が告発され、高は県長呂紹岩によって逮捕投獄されてしまうが、武済川ら武郷の進歩青年の出助けで出獄している。

1927年3月には高沐鴻の第一詩集『天河』が出版される。しかしこの年の夏から秋にかけて高長虹が杭州で療養し、またの末弟高遠征の死により高長虹・高歌兄弟の間に不和が生じたため狂飆運動は一時停滞する。

1928年1月には新たな狂飆社の媒体として『世界』週刊が創刊され、4月には同人の出資による狂飆社出版部が成立する。高沐鴻は9月に高長虹の求めに応じて上海に赴き、高長虹、柯仲平、鄭效洵らとともに“狂飆叢書”を組織・出版し、さらに狂飆出版部の編集作業を主宰した。その上狂飆演劇部にも参加し、自身も旺盛な創作意欲を発揮するなど、獅子奮迅の活躍を見せる。

『湖上曲』はこの時期に創作されており、高沐鴻は当時を次のように回想し

ている；

「上海で、概ね 1928 年春（秋の間違いであろう、論者付す）、向培良の湖南の同郷が上海にやってきて、我々と同居した。向培良は私にこの客人の経歴を話してくれた：向培良の湖南の同郷人である彼は熱血漢であり、故郷では先が無いとため湖上に強盗となり、自分の気に入らないものをひたすら破壊しつくした・・・この人物の思想と当時の思想は合致し、大いに啓発をもたらした、そこで私は彼をモデルとして長編詩『湖上曲』を書き、向培良が主催していた『青春』雑誌誌上に発表した。のちに私は向培良の助力の下、上海で正式に出版した。」⁶⁸

このように、狂飆社同人である向培良の同郷人の経歴に深く感情移入して制作されたことがうかがい知れる。以下順を追ってみていこう。

まず冒頭の「序曲」において、「我」は自身の過去を回想し、本作を執筆した理由を明かす；

「夜が来た—青黒い夜を捕らえて、／私はちょうど過去の鼓動の夢の中をぶらぶらする：／私の足元にはふた筋の路—／ひとつは紅色の戦闘、一つは紅色の愛情。／人は私をサタンの群れに並べ、／また人は私を救世の星と呼ぶ、／だが私が持つのはこの単調な名前だけではない、／何故なら私の心は自分でもわからないのだから。／ただあの古い時代は私に苦悶と傷の痛みを与え、未来の夢想は私に追慕と導きを与えてくれた；／私は人生にあって奮戦する子供だ、／私は自分の心の躍動を拒めない・・・。／昨夜の松明はすでに消えたが、東の空がまだ明けない／今朝の大いなる夢が早くも破れたが、鶏鳴はついに聞こえないまま：／何が戦闘か、何が愛情か、／私はここですすでに暴風雨のような生を送っている。・・・」⁶⁹

「紅色の戦闘」と「紅色の愛情」、これが「サタン／救世の星」と矛盾する呼び名を持つ「我」の歩んできた道であり、同時に本作の主題となっている。

「大いなる夢はまだ醒めないか？それともまだ深く淀んでいるか？／夜がやってきた、私は心の痛みを止められない！／心の痛みから、私は試みに長編を一曲書いてみた—／この長編詩は、わが心の痛みを止められるだろうか？・・・／まさに、これは罪惡の明文となるかもしれないし、／人類史上の美の賛歌となるかもしれない！」⁷⁰

そして現状をまだ明けない「夜」と見做し、心の痛みを止めるために「罪惡の明文／人類史上の美の賛歌」となる本作を執筆した、と理由を明かす。

「一」

もとは書生であった「私」が夢の中で老人の「この世の塔の先端には特殊な大虫がいる！／踏みにじられ、食べ物にされている血肉こそ、我ら民衆の心肺なのだ！仇を討て！恨みを晴らせ！少年よ！人類を救う戦いを！」⁷¹という訴えを聞き、この世にあって害をなす「大虫」と戦う。一度は成功するが、官僚たちによって無実の罪を着せられてしまい青天のかなたへ旅立とうとしたが、民衆に引き留められ、人の世に留まり戦い続ける決心をする。

「二」, 「三」

そんな「私」の前に美しい「君」が現れ、「私」の赤心に好意を抱き、幾度も「私」の心の中に入ろうとする、だが「私」は戦いに闘志を燃やし彼女の思いを拒絶する。しかし戦いに身を置く「私」のもとに「君」が「私」のせいで病気になったと伝わり、「私」は「君」の家に見舞いに行き真偽を問うが「君」はそれを否定する。しかし言葉とは裏腹に真っ赤になって恥じらう「君」の態度から「私」はその本心を知る。

「四」

「君」と別れ、「私」は再び戦場に身を投じる。「私」は支配者たちを打倒して人類の階級をなくし、貧富の差をなくしたいと考え、「君」についてきて欲しいと願う。

「湖上に在って、私は主人となろう一人類の階級を、一掃してしまおう！富める者たちの搾取はいかほどのものか！貧しい同胞はどれほど漂泊していることか！」⁷²

「五」, 「六」, 「七」

「私」の部隊のもとに「君」がやってくる。デマや噂が「私」の名声を損なうのではないかと心配している「君」に、「私」はその気持ちを尋ね、「私」は「君」を抱きしめるという行動で気持ちを示す。気持ちを通じ合わせた二人は黄昏時に「君」の家で逢引し、再会を約束して口づけを交わす。

「あなたの頭は私の胸の中で、飛竜のごとく枯ヨモギのごとく転がる、私は笑って“ご近所や兄弟を起こしはしないか？”あなたは声を大きくして“死ぬのも怖くないのに、何を恐れるの！”あなたはずっと頭を振り、声を上げて泣いた—私の胸の中で、私は全てをあなたに与えずにいられなくなった」⁷³

「八」, 「九」, 「十」, 「十一」, 「十二」

敵が攻め込んできて、「私」と仲間たちは湖心に立てこもり、新しい世界を

夢見る。「私」は「君」を忘れ戦いに専念しようとするが、「君」が小舟に乗って「私」のもとを訪れ、ここで「私」とともに過ごすと告げる。湖に攻め寄せてきた官兵を打ち破り、巧言を弄する指揮官を処刑し、捉えた兵士たちを訓練して仲間にし、「私」たちは勝利の凱歌を歌う。

その夜「私」と「君」は湖心に遊び、月と星明りのもと「私」は「君」の美しさと大胆さ、情け深さを称える、しかしそこへ「君」の夫の父親が仲間を連れてやってくる；「だが今日、この“真の心”と“偽道徳”の戦争のもと、真と偽、偽と真、どちらが勝ちどちらが敗けるか見てみよう！・・・彼らはやってきた！教義を護る僧侶のような悪漢たち」⁷⁴。「私」は「君」をかばい、敵を迎え撃つてことごとく打倒するが、「君」の父だけは見逃してやる。

「十三」、 「十四」

夜、「私」は船上で琵琶を奏でつつ歌う。船倉から「君」が出てきて琵琶の演奏をやめてほしいと言い、理由を尋ねた「私」に「君」は昔語りをする；実は二人が出会う前に、「君」は「私」の奏でる琵琶の音に心惹かれ、「私」に恋心を抱いていたのだという。しかし「君」の周囲の人々は「私」を強盗が来たと恐れる。救おうとしたはずの人々にサタンと同列に見做され、「私」は苦悶する。

「傷心また傷心！…戦争も平和のため、戦争は我ら民衆のため、自由のために戦い、多くの人民のために戦う、我らは悪の神に反対する！我らはまさにサタンと敵対しているのに—あなたは蔑んで同一視する。」⁷⁵

「十五」、 「十六」

湖で「私」たちが行った道はただ一つ、“人心”であった。革命、戦争、殺人、略奪もすべては民衆のため、さらに「私」は恋愛の自由の保障と強制的禁止を伝えた。しかし娘を犯しその母を惨殺したものが現れる。「私」は怒り、犯人を堤防のふもとで始末した。しかし「私」は自身の行為に悩み、いつになったら人々が分かり合える時がくるのかと自問する。

昨夜の事件に悩む「私」は活力を取り戻すために小舟を出して漁を眺め、夢の中彼は改めて「私はやはり永久に民衆のため戦士でいよう」⁷⁶と誓う。富裕層や官僚に搾取され続ける民衆の姿を前に「私」は「浮士徳」（ファウスト）に問う；あなたがかつて追求した夢は何故いまだ実現していないのか、と。混乱の中進むべき道が見いだせず、革命にも懐疑的な「私」は思い悩む。夢から覚めた「私」は「君」を見出し、その閃光のような瞳に癒され、人の世には「革

命と愛情しかないのだ」⁷⁷と悟る。

「十七」、「十八」

敵との激闘の中、傷ついた「私」は「君」の家に運ばれる。血まみれの「私」を見ても「君」は穏やかに着衣の血を洗おうと申し出る。なぜか「私」は激怒し、荒れ狂う。しかし「君」は落ち着き払って私を殺すもいいが、着衣を洗ってからにして、と繰り返す。落ち着きを取り戻した「私」は「君」に詫びひどく後悔する。そしてこの女神に出会えた幸運に感謝する。

敵兵を撃退した湖心の勢力は得意の絶頂、理想の実現も近いと夢想する。しかしその夢が破れる日がやってきた、裏切り者の手引きによって敵兵の湖心への侵入を許してしまう。敵味方双方に大量の死者を出す激闘の果て、ついに「私」たちは敗北し、「私」は一人湖心を脱出する。

「十九」、「二十」

湖心は陥落し、人影もない。「私」は「君」の家に向かい、憔悴した「君」と会う。夜明けに「君」と別れた「私」は再起を誓い旅立つ。その後「私」は「君」が役人に捕らえられたと聞き、彼女を救い出すべく自首も考えるが、結局変装して潜入し、やつれた「君」の姿を目にする。「君」は金のイヤリングを手渡し、永遠の愛を誓って「私」を逃がす；「あなたは私の両手を握り、大声で言った“行きなさい、何をしに来たの！”“永遠にあなたを愛しているわ！過去も今も！・・・”ああ、あなたの手は両耳をさぐり、耳たぶから金のイヤリングを外し、光は透き通らんばかり。あなたは言う“これを路銀にして！無間の未来に、あなたを待つわ。”」⁷⁸そして5年の歳月が流れた。

「二十一」、「二十二」

「私」は「君」と再会し、新たな心、すべてを無私の心で愛する新たな愛情の誕生を言祝ぐ。そこへ夜明けがやってくる。

「私」は湖上の曲を我が心と「君」に捧げる、この世界には「私」たちを嘲笑い革命と愛情を食い物にするものたちに満ちてはいるが、それでも「私」は人類の新生を信じる。嘗ての過ちを改め、立場を固めて皆が手に手を取り合う世界を目指すと言宣する；

「古い時代の影は立ち去ろうとし、新しい精神は既に勢いよく芽吹く。我らの子供たちよ、我らの子孫たちよ！紅い太陽は東に昇ったかどうか？ただ君たちを待っている：心あるもの！情けあるもの！血の通ったもの：火、火、火！熱、熱、熱！人、人、人！心、心、心！-似通った新しい人の心！復活

した、復活した、あの時が！…大いなる世界はこの爆発をひたすら待っていた、過去なるものは既に跡形もない…我らの勇気を鼓舞せよ。我らの足元を固めよ。人類のために、深い情愛のために、正義と人道をまもって最後まで戦う—その時、我ら人類の心は合体する！男女の心は合体する！私は手に手を取りあい再び我が愛する者と巡り行こう、最大に満たされた夢の中に巡り行こう！あなたを紀念しよう、愛する人よ！私を紀念してくれ、愛する人よ！人類の再生を紀念しよう、ふたりで、愛する人よ！紅い太陽が東に昇る！紅い太陽が東に昇る！」⁷⁹

『湖上曲』でまず注目すべきは、「紅色の愛情」、「紅色の戦闘」、「階級」、「革命」、「紅い太陽」といったキーワードからも明らかなように、急速な左傾化の兆候が見られる点である。初期の『新詩集』の段階においても社会へ眼差しは向けられており、本作同様男女の恋愛を詠った『天河』においても儒教倫理への反抗という側面は存在する。また『夜風』においても反封建・思想革命といったテーマを前面に打ち出しているが、ここまで明確に左翼革命に与するメッセージを発してはいない。こうした急な方向転換の理由としては、上述の通り高沐鴻自身の武郷における革命運動への参加、そして1928年当時魯迅・茅盾と創造社・太陽社の間で展開していた革命文学論争の影響が考えられる。

後年、高自身は、以下のようにこの作品を批判的に回想している：

「この作品は、私自身は、芸術上、構成は整っていたが思想内容は宜しくない。柯仲平同志も嘗て：『湖上曲』の主題は間違っており、情熱の無駄遣いである、と批判している。私はこの批評に同意するし、実際に符合すると思っている。」⁸⁰

しかしながら、本作は作風においても大きな変化が存在していることを指摘しておきたい。第一に、叙情的かつ観念的な詩風であったのが、本作においては豊かな叙情性を維持しつつも叙事性及び物語性を有するようになってきている点、第二に、「二十二」章からの引用から明らかなように、従来のワンフレーズが比較的長い散文詩的な作風であったのが、本作では短くリズムカルなフレーズの繰り返しが多用されている点である。

上述の通り、この時期高沐鴻は故郷の革命青年李逸三をモデルとした長編小説『少年先鋒』も執筆するなど、活発な創作活動を展開している。しかし1928年冬、吐血のため日本人医院に運ばれ、肺結核のため三カ月入院し、経済的にひっ迫した結果、上海で暮らしていけなくなってしまう。

1929年6月、上海の同人に別れを告げ、高は故郷の山西省武郷県に戻り、故郷の青年たちに上海で耳にしたソビエト地区における革命闘争について宣伝するなど、引き続き革命運動に従事する。

一方狂飆運動は、三章でも言及したように29年春から演劇運動に重点を置くようになり、上海、南京での公演を成功させる。しかし演劇部門の責任者であった向培良が南京政府に引き抜かれて離脱してしまい、高長虹の奮闘空しく解散してしまう。さらに尚鉞、柯仲平といった主要メンバーも共産党の地下組織工作に従事するなどメンバーが散り散りになってしまい、1930年初め、高長虹の日本行きとともに、狂飆運動は終わりを告げる。

5. まとめ

以上、高沐鴻の習作期から狂飆運動期にかけての詩作について分析を加えてきた。ここで一度その変遷の跡を辿ってみよう。

『新詩集』（1921）において目覚めたばかりの自我というフィルターを通して自然と社会の矛盾を見つめた高沐鴻は、高長虹らの導きで狂飆運動に身を投じる。第一詩集『天河』（1927）においては封建的婚姻制度の重圧をはねのけて愛する人と結ばれるまでを叙情豊かに描き、続く第二詩集『夜風』（1928）において「自我」、「恋愛と闘争」といった『新詩集』及び『天河』から継続するテーマから「反封建・思想革命」というテーマへの転換を果たす。そして第三詩集『湖上曲』（1929）に至って急激な左傾化、叙事性と物語性の獲得、詩的言語の単純化といった大きな転換点を迎える。

冒頭でも触れているが、本稿の目的として高沐鴻の詩風の変遷の跡を辿ることに加えて、他の山葉蛋派の作家との比較検討も視野に入れている。今回明らかとなった高沐鴻の詩作における叙情性豊かな作風から叙事性及び物語性の獲得、という転換は、彼がその登場を準備した山葉蛋派の作家群がたどった道筋と相似形を描いていると言える。

では狂飆社から離れ、一人世界と向き合う高沐鴻は、この後どういった詩歌を紡いでいったのであろうか、またその変遷の道筋は山葉蛋派のほかの作家のそれと比較してどのような合致あるいはズレを生じるのであろうか？引き続き考察していきたいところであるが、あまりに紙幅を費やしてしまった、残された問題については稿を改めて論じていくこととしたい。

¹ 本稿において使用する中国語の簡体字・繁体字は、引用部分を除いてできる限り日本語の新字体で表記することとする。

² 『一群被驚醒の人—狂飆社研究』（廖久明 2011年 武漢出版社、以後廖2011）、「高沐鴻生平及創作年譜」（李東光『高沐鴻詩文集』所収）などを参考にした。

³ 廖2011によれば「狂飆社論」（韓起『流露月刊』2巻1期1931年5月）、「魯迅与狂飆社」（林辰『文芸春秋』6巻4期 1948年4月）の2篇のみであるという。

⁴ 『高沐鴻詩文集』1991年 北岳文芸出版社 所収、以下「1. 2」で挙げられている高沐鴻に関する研究は基本的に『詩文集』に収められている。

⁵ 六三運動：1919年6月3日に北京で発生した愛国運動。時の政府を批判した学生たちを軍閥政府が弾圧し、上海での大規模ストライキにつながった。

⁶ 本節の内容は「狂飆社編年記事」（董大中『新文学史料』2002年8月）及び廖2011を参照している。

⁷ 『中国新文学大系』（香港文学研究社）「小説二集導言」において魯迅が引用したものを用了。

⁸ 原文は“铁屋子”訳は『阿Q正伝・狂人日記』（竹内好訳 岩波文庫 1955年）から

⁹ 廖久明2011

¹⁰ 「狂飆社編年記事」（董大中『新文学史料』2002年8月）による。廖久明2011によれば15篇。

¹¹ 『新青年』6巻1号（1919年1月 1988年上海書店影印本）「本誌罪案之答辯書」において提唱している。

¹² 『高沐鴻詩文集』（上）p 24、以後「天河」第1章は「天1」, 「秋雨」第10章は「秋10」といった略称を用いる。原文は「我所欲言, 何以脱出悲哀? 人类是何等堪怜悯呢,」

¹³ 同上 p 27、原文は「我请你早将这无边枪痛的宇宙中的滑稽剧, 从你的手腕中收拾去。更无意义可寻了! 天帝, 我请你收拾起这多幕的滑稽剧。」

¹⁴ 同上 p 27、原文は「绝伦的奇鸟」

¹⁵ 同上 p 30、原文は「黄尘滚滚中卷去了」

¹⁶ 同上 p 31、原文は「我爱! 人家所有丰厚的, 华彩夺目的妆奁, 真能惹起你的鄙视么? 一然而为甚么你甜蜜地收受了呢?」

¹⁷ 同上 p 33、原文は「'婚姻自主父兄', 你曾如是以询问你的圣明的心么?」

¹⁸ 同上 p 34、原文は「"我所心爱的人, 我欲飞坠在他的怀里, 但是我父我兄, 狰狞地怒着, 用顽强的绳索绊折了我的双翅"」

- ¹⁹ 同上 p 34、原文は「“母亲！你在细听我的话么？你莫不是也如我的父兄以我为奇货么，而欲自我取值，以偿他们一辈子的吝嗇罢？你默默无语，我不是你的肉么？你可以从你的胯下，割一块肉，给人家齧尝么？—但是我可以遵这些乱命吗？”」
- ²⁰ 同上 p 34、原文は「“我将要求我心作主，脱出了这残食的家！我将从他飞去，跳去，奔去…而我终不能忍受家庭之鬼的宴前的仆役的职务了。”」
- ²¹ 同上 p 35、原文は「我们将在永无晤面期了！你被强者夺去，我没有力量从他们凶利似虎狼之手掌中，取回爱来！」
- ²² 同上 p 43、原文は「我的双手，抓住你纤纤十指。你的眼睛圆椭地流出爱的神秘。」
- ²³ 同上 p 48、原文は「众毁森立着，针刺着，你我斗体无完肤了。可怜你是未出闺阁的女娃，受此重创，呻吟之下，怨我也不？爱呀！世界如果太不仁了：我便撑刀杀去不为无礼，小丑毛贼，见影便鼠窜，我此际不是弱者了！」
- ²⁴ (「天 24」) 同上 p 48、原文は「我为此舍弃过我所认识的了的我的使命，让人类疯癫着，我也随之漂沉于疯癫之群吗？衣食！衣食！致人死命的毒物呀！我为缺乏这些，我便可以谄笑于有力者之手下么？—我知我孑然一身，早被群众的利口包围着了！我可以及早悔过，匍匐着要求赦免与怜悯于他们吗？」
- ²⁵ 同上 p 48、原文は「憎恶与揜弃的群众的嗤吁」
- ²⁶ 同上 p 48、原文は「爱呵！我镇定以恋为正义了」
- ²⁷ 同上 p 49、原文は「你们的聪明的奴性，使我不得不戴罪犯的名冠；而你们是愿自囚于无穷之中的真囚实犯呀！」
- ²⁸ 同上 p 49、原文は「我在千言万语中，我不得一句可以赞美你。爱呀！你太玄秘了！我提笔于何时止呢？」
- ²⁹ 同上 p 50、原文は「蹒跚着我走上芳洲。」
- ³⁰ 同上 p 50、原文は「啊！我何为对着盛开的花留连呢？」
- ³¹ 同上 p 50、原文は「我的一身仅徐有弱笑」
- ³² 同上 p 50、原文は「我将死于这个所在，成就爱的伟大与傲岸了！」
- ³³ 同上 p 52、原文は「伊是个精灵！是个翻滚得海洋得精灵！有哪个肮脏之物，不坠流而涤荡于清静呢？我忽地似脱却兽肤禽心，只留得一把干净的骨骼，贡献在爱神的座前了。」
- ³⁴ 同上 p 54、原文は「我软跳而低吟。我已脱掉那累赘槎杈的形体，我已捐舍了沉重压迫的喘声。」
- ³⁵ 同上 p56、原文は「我的魂飘飘地窥伺在心门之下，它用惺松的眼光盯着你。它忘却甚么叫羞怯了，我遗弃了我卑污的躯体。」
- ³⁶ 同上 p56, 57、原文は「我知道它和它的确消失了躯壳的隔阂，自相爱的拥抱中溶化而

成一 .」

³⁷ 同上 p 59、原文は「携手呵，我的至爱者，尔我共羽化了，且去悠游！」

³⁸ 同上 p 63、原文は「同居的绚丽的梦影破了！爱人呵！我们好像两只愚呆的小鸟；当猎人已经埋伏在树下时，我们仍依恋地甜睡在树头。呢喃地不绝地我们读着情诗，那知道紧勒在弓弦上的弹石，将破坏了我们的安巢呢？……」

³⁹ 同上 p 66、原文は「我雄美的躯体，消磨于别离，吞蚀于怀思了。好像一朵鲜花，渐褪出憔悴的颜色，爱人呵！知它将凋谢于何时呢？……」

⁴⁰ 同上 p 67、原文は「我的头震震地在痛，我的神经绵绵地如病。健全的事业和责任的道路，催促着我的脚步，但我不能自由行走了。我是你的奴隶－自荐的奴隶，不待着你的命令。」

⁴¹ 同上 p 76、原文は「此山北之寒冬呵，将何时其告尽？我奴隶之贱身呵，亦有归家之日？」

⁴² 同上 p 79、原文は「我得到爱。再有宝贵于爱的东西么？我担负的是些甚么呢？糟粕！糟粕！我能为糟粕而损害了我灵魂上的光么？」

⁴³ 同上 p 87、原文は「为甚么我舍弃你在异土呢！我这个贼！只求糊口的贼！我不能在爱的同居中，忘掉贫贱么！？」

⁴⁴ 同上 p 88、原文は「华，我的爱人！别离虽久，想见有日了，你为此而怎样喜慰呢？归去之朝，蓦然的相逢下，你不羞怯么？」

⁴⁵ 同上 p 89、原文は「一切一切，经过你的思忆都如云雾般地消散去，美丽和平光明开朗的天地的幕，忽然挂现在你的目前。你携定你的爱人的梦影，踟蹰而飞翔，欢笑而低吟吧；飘过山角水涯，你携定它不放。」

⁴⁶ 「狂飆社及其他」－訪老作家高沐鴻同志 曹平安『汾水』1980年12期 本稿では『詩文集』所収のものを参照した。

⁴⁷ 「划破暗夜的利剑 - 试评高沐鴻的早期诗集『夜风』」李東光 『詩文集』所収

⁴⁸ 同上 p 141。

⁴⁹ 同上 p 164、原文は「剖开吧！请剖开这痛苦的藏匿的胸膛呵！」

⁵⁰ 同上 p 144。

⁵¹ 同上 p 155。

⁵² 同上 p 145

⁵³ 同上。

⁵⁴ 同上、p 147

⁵⁵ 同上、p 170

⁵⁶ 『『莽原』週刊 合訂本』上海書店影印 1984年7月 p 57

⁵⁷ 同上 p 113

⁵⁸ 『魯迅文集』1卷 p 102 (竹内好訳 ちくま文庫 1991年) から。原文は“我想: 希望是,, 这正如地上的路; 其实地上本没有路, 走的人多了, 也便成了路。”(『魯迅全集』1卷)

⁵⁹ 『『莽原』週刊 合訂本』上海書店影印 p 49

⁶⁰ 『高沐鴻詩文集』(上) P249、原文は「本来这国土, 才有了些小的旋风, 那里能当下看到翻天覆地的暴风。我们不过聚合着抡动风机, 助风暴地罢了, 那里能便在风下, 杀伐敌人。但这助风起势, 也便够我们一生欣慰了。

风盛火起的日子, 都在我们的最后一日。即使世上的火点, 在我们的一生还未聚拢来, 然而我们各个也必须放几趟较大的野火, 在最后一日, 以留纪念。

就这样聊以自慰吧! 我们的世界, 也许是千万年后子孙的世界, 但是我们的火, 留有痕迹, 我们仍然活着。我们就干着这样无意义无代价的勾当。』

⁶¹ 同上 p 127

⁶² 同上 p 133、原文は「在天星中, 在海浪中, 在光和爱之力之中, 有的是: 欢喜呵, 兴奋! 热烈呵, 轰动……寂寥和冷清都死了; 没有黄昏。欢喜呵, 兴奋; 热烈呵, 轰动; ……这些崇荣地赠礼呵, 将被你接受; 在飞行中, 在前进中。飞呵, 心! 前进! 前进! 前进!」

⁶³ 同上 p 134

⁶⁴ 同上 p 135

⁶⁵ 同上 p 19、原文は「- 主呵! 不要骤离开我; 我求你的最后的教言, 我的最后的凭依呵! 在这黑暗和渺茫占领了的可怕可厌的世界。」

⁶⁶ 同上 p 20、原文は「神给我了; 那个最后的永久的凭依! 我将作个人道的说教者, 深言奥语的钟。我将作个精神的战士, 暗杀团的首领。我的话浸渐地如河流般的流入世间的腹中。」

⁶⁷ 「混然天成的象徴芸術 - 読高沐鴻散文詩「最後の憑依」」李緒珍 韓国鋒『詩文集』所収

⁶⁸ 「狂飆社及其他」- 訪老作家高沐鴻同志 曹平安 『汾水』1980年12期 本稿では『詩文集』所収のものを参照した。

⁶⁹ 同上 p 251、原文は「夜晚来 - 捉着青灰的夜呵, 我正在一个已往的鼓动的梦里游行: 我的脚下是踏着两条路子呀 - 一条叫红色的争战, 一条叫红色的爱情。有人列我于撒旦之群, 也有人呼我为救世之星, 可我所有不只这单调的名号呵, 因为我的心儿是我也莫名。只是那老时代给了我苦闷和创痛, 未来的梦想又给了我向慕和追寻; 我便是人生中一个奋战的孩儿呀, 我不能禁拒我的一心儿跳动。……虽昨夜の燭火已熄, 东方却尚未明, 虽今朝的大梦刚破, 鸡声终未听闻; 说甚么争战呵, 并甚么爱情, 我便是在这里呀, 已度过了一般暴风雨的生存。……」

⁷⁰ 同上 p 253、原文は「大梦未醒? 大梦还在浓浓? 夜晚来, 我止不住我心头的痛震! 从心

头的痛震里，我试写出一段长曲呀－这一段长曲，又能否止得我的心头痛？…正是呀，这也许变成了一段罪恶的明文，这也许变成了一段人类史中的美的歌颂！]

⁷¹ 同上 p 254、原文は「此世塔尖上爬了超殊的几只大虫！“而装压踏，被嚼吞了的血肉，“才是我们的呀民肺众心！…“你报仇！你雪恨！你－“你少年呵，你要作救人类的战争！…

⁷² 同上 p 270、原文は「在湖上，我将作主翁－人类的阶级，一扫土平！富人的榨取又何其多！贫苦的同胞多少飘零！]

⁷³ 同上 p 281、原文は「你的头儿滚在我的怀中，如飞龙又如飞蓬，我笑着说：“可不怕惊醒了四邻和弟兄？”你又大声，“我连死都不怕，怕做甚！”你仍然乱滚，乱滚，哭得放声－在我的怀中，我于是不得不完全赠与你以我的一切了，]

⁷⁴ 同上 p 300、原文は「可今日，便是在这“真人心”与“假道德”的战争之下呀，真对假，假对真呵，也看个谁输谁赢！…他们来也！护教的僧侣似的恶汉们！]

⁷⁵ 同上 p 311、原文は「痛心又痛心！…战争也为了和平，战争为了我们的众民众，为自由而战，为多数人民而战，我们反对几个恶的神！我们正是撒旦对敌呀，－你浅视者莫视着一概相同。]

⁷⁶ 同上 p 319、原文は「我还是永久为民众作战士去吧！]

⁷⁷ 同上 p 325、原文は「人间只有革命与爱情]

⁷⁸ 同上 p 341、原文は「你握着我的两手，大声说，”去吧，你来做什么？…”大声说，“我永远爱你的！无间往今！…”唉也唉，你的手儿摸上了你的两耳，耳旁边你摘下金耳环一双，闪光磷磷。是你说，“取此以作路上费用！无间未来呵，我把你等待”]

⁷⁹ 同上 p 352、原文は「老时代的影子快移去了，新的精神已经怒生。看我们的孩子们呀，看我们的后生！看红日东升犹未升？只等待你们呵：有心的！有情的！有血的：

火，火，火！热，热，热，人，人，人！心，心，心！－相类的新的的人心！复活了，复活了，那个时辰！…大世界只等待着这一爆发呵，过去者已烟灭如影。…鼓动我们勇气吧，立定我们的脚跟吧为了人类，为了多情，拥护正义和人道作战到有终－那时节，便让我们人类的心心相印！男女的心心相印！－我将携手再和我的爱者游行了，游行于一个大饱和的梦中！纪念你，爱人！纪念我，爱人！纪念人类的再生吧，你我呀，爱人！－红日东升！－红日东升。－]

⁸⁰ 「狂飊社及其他」－訪老作家高沐鴻同志 曹平安『汾水』1980年12期 本稿では、『詩文集』所載のものを参照した。

*本稿は、令和元年度（2019年）科学研究費補助金（課題番号19K00371）による研究成果の一部である。